

「吉治先生の集中講義」

元愛知大学文学部助手

坂井達朗

年に二回、それもわずか数日間、つづおめにかかる機会が、数年にわたってあったというだけの浅いえにしえである。だから中村先生について、何か人に語るに足るほどの事があると言うわけではない。全く個人的な思い出に終始することをお許しいただきたい。

今でもそうかも知れないが、私が勤めていたころの愛知大学文学部には、社会学科・史学科共通講義というものがいくつかあって、

れぞれに世話をした学科が決っていた。「日本社会史」もその一つで、社会学科の受け持ちということしかったが、どういう訳かずっと休講になっていた。

未だ今日のように「社会史」がブームになってはやされる時代ではなかったから、このカリキュラムは新任者の眼に新鮮なものに映り、開講されないことが惜まれた。聞いてみると、学内には専任者がなく、ずっと講師を依頼してきたという。かつては有賀先生や喜多野先生にも、お願いしたことであった。両先生とも、当時すでにかなりの高齢であったし、又お忙しい仕事についておられたわけだから、おひきうけにならないということであったのかもしれない。

何年かして、といふ訳か知らないが、この科目を再開すると言ふ話が突然出てきて驚かされた。ついては中村吉治先生に担当していただくというのである。それはすばらしい。しかし私にとっては藪から金のべ棒のような、こんなうまい話が本当に実現するのだろうかと思つた。

恐らくは先生が仙台から引越され、湘南から東京への通勤にも慣れてこられた様だから、という読みがあつたのではなかろうか。年間に何週間かの集中講義の期間が学年暦にくみ込まれており、その間は一般の授業はすべて休みになっているのは、この様な遠方の講師をお願いする時のためであつた。

どの様に交渉がなされたか知る由もない。多分、学部こそしがえ同じ学内におられる愛弟子の村長利根朗先生のお手をわざわざしたかと想像するのだが、思いがけず大先生の非常勤講師依頼が実現し、豊橋の学生さんが中村先生の講義を受けることが出来るようになつ

た。かく申す私も、当時は学科の最も若いスタッフであったので、足許が多少御不自由な先生をご案内するという名目で教室までお伴をしそのまますみに座ってその幸運のおすそ分けを頂戴する機会にめぐまれたのである。

講義中の先生は、テキストに指定された「日本社会史」や「日本の村落共同体」などを一応は机の上に置かれるものの、開いて見ることはごくまれで、その意味ではほとんどそらで、共同体の変化の過程と論理とを、古代から近代まで順を追つて、理路整然と述べていかれた。特に先生が力を入れられたのは、どの時代についても成立し安定した社会の構造を画くということよりも、むしろ変わりつつある社会の変化の度合とその底にひそむ変動の論理を探り出す、という点にある様に思われた。それまで書物の上で親しんできた「……が……になる程度にまでは変化してきた」という、先生の独特の表現の真意が理解できたような気がしたことを今に記憶している。

語り口は決して「立板に水」というのではない。さりとて訥をというのではない。強いて言えば「諄々と噛んで含めるように」、という風であった。隨時にあげられる史実は、「自家薬籠中」という表現の通りに、自由自在にとり出される觀があった。新米の教師であった私は、自分の学生時代に聴いたいくつの名講義とは、またちがつた種類の、この名講義に魂をうばわれる思いであった。

講義の終った後が、またすばらしかった。先生は殺風景な教員控室よりは、村長先生の研究室で放課をすごすことを好まれたが、次第に四階までの階段の上り下りをさけるために、一階にあつた私の室で休まれる事が多くなった。村長研究室から愛用のコーヒーティ

ト一式がおろされ、昼食のザルソバの後は必ず美味しいコーヒーを囲んで、時には先生はソファーに寝そべったりされながら、高度の内容を気楽な雰囲気で語られる。「天皇難煮論」とか「奴隸小守り説」などというお話が出るのもこんな時であった。それには、社会学科や史学科の教員のみではなく、東北大学や旧制二高などで先生の聲咳に接した、何人かの常連が加わり、あたかも村長研究室が一階に引越してきた様であった。後になって、これが名物の「ランチタイム・セミナー」であると教えていただいた。

ある時、先生が休息されている最中にたまたま一人の学生が、やっかいな質問をもって部屋を訪ねて来ることがあった。先生が当惑している私にかわって、懇切にお答え下さい、レポートの書き方まで指導されるのを、傍で拝見しながら、学生の指導の仕方にについて蒙を啓かれる思いがしたのであった。

またこんなこともあった。ある放課の時間、ふと私の書棚を見廻された先生は、その内容があまりに雑然としているのにあきれ返られてか、「君は八宗兼学の僧だなあ」とからかわれた。自分の能力をも省みずに二兎を追いかけてはいけないと言う。この御訓誠は迷いの多い私には胆に銘じた。有難かったのは、それに統いて私がどんな風に勉強しているかをおたずね下さり、今後の進め方について御指導を賜ったことであった。「歴史書としてすぐれているのは、固有名詞と年号がなるべく少しか出てこない書物である」という箴言をうかがったのは多分この時だったと記憶している。

最初の一年位は、先生御自身も健康に必ずしも自信を持っておらず、何時やめなければならないかと、常に気づかれておられた様だった。教室から帰られるや、「やあ、僕もよく続くねえ」と破顔

されてソファにどっかりと腰を落されたのも、二度や三度のことではなかった。御疲れになっていることがはた眼にもありありとわかつた。気候のよくない時に、慣れぬホテルに泊りながら、数日間連続して話しをしていた大切なのは、たしかに苛酷であり、非人道的であるとすら思つたことがあったが、どうしてさしあげることもできなかつた。

しかし先生の肉体は、次第にこの苦しい年中行事に慣れてこられた様であった。一年間の日定が無事終了して帰られる時に、「また来年会いましよう」というお言葉が出来るようになったのである。こうして「吉治先生の集中講義」は、社会学研究室の楽しい年中行事になつた。

学生諸君も先生には特別親しみを感じていた様子で、朝ホテルから一人で出校される時にすれちがつた某君は、「ステッキをふりまわしながら実に楽しそうに歩いておられましたよ。眼がお悪いというのは本当ですか」とコッソリ私にたずねたりした。

講義の予定が終る前日の夕食は、先生を囲んで小宴を張るのが例であった。文学部以外からも、ゆかりの人々が集まり、十名前後が、市内のそこ・ここで会食する。そんな時、お酒をほとんど上らぬ先生が、飲兵衛達を前に実に愉快そうに談笑される姿は、度量の広い、寛容なお人柄を感じさせるものがあった。

しかしそれだけで一代の碩学が生れるわけはない。ある時、先生の旧い同窓の方が、たまたま同時期に集中講義にこられ、日定が一日だけ重なったことがあった。事情を知らぬ我々は、両先生の歓迎会を同席にすれば、同級生同士で昔話もあって楽しいだろうと考えて、念のために御意見をうかがつた。すると先生は、決然として言

下に拒絶されたのである。その時のきびしい口調は、まさに口の悪い信州人のそれであつた。理由は学問と政治とに関する、人間としての節操の問題であつたかと記憶する。この時、背すじのキチッと伸びた、明治生れのリベラリストの強い精神の片鱗を見た思いがして、一同肅然と襟を正したのであった。

何年かして私は愛知大学を辞した。その後も中村先生の集中講義は続けられているとはうかがつたが、もうおめにかかる機会はなくなつた。ただ、かつては年二回来校されたのが一回になつたと聞いた時は一寸さびしい気がした。

そんな頃、いなくなつた私の事について、全く別の處で、先生がある感想をもらされたということを、人づてに耳にした。出講先でまたま出会つただけの若者を記憶に留められ、心にかけていて下さつたと知つて、改めて恐縮する思いであつた。それを知つた以上、本来ならば手紙ぐらいは差し上げるべきであつたかもしれない。しかし妙に引っこみ思案の所もある私は、それをおこたつている内に時間が経ち、ついにお話しようにもできない様になつてしまつた。

今思ひ返してみると、先生との雑談のテーマは信州、特に平出にまつわることと、有賀先生に関係することが多かつた様な気がする。その有賀先生へのお別れの式で弔辭を読まれる先生のうしろ姿を、講堂の二階ギャラリーから友人と二人並んで拝見していた事を思い出す。その時、先生はお詞を「今日はこれでお別れしますが、きっと又、どこかで逢えるでしょう。それまでは、おぼつかない足どりながら歩き続けて行くつもりです」と言う、感動的な一節で結ばれた。

人の別れと言つものは、本当にそういうものであるかもしない。

そうだとすれば、私もいつか、どこかで中村先生におめにかかるるということになる。「集中講義」をまたお願いする日までには、せめて「門前の小僧」ぐらいまでには成長しているように、少しでも前へ歩いて行かなければならないと思っている。

その節はまたどうぞよろしくお願ひいたします。